

事を成し遂げた。本書は考古学と植物学という 2 足の草鞋を履く、日本では稀有な著者による、クリの自然史・文化史について書かれたユニークな著作といえる。

なぜ自然史なのかといえば、対象であるクリそれ自体について、例えば分布域や分布密度、変異性、集団の遺伝的構造などを詳しく検討しているだけでなく、その動態ではこれまでの日本の植物学では殆どベクトルとして考慮されたことのないヒトの影響をデータをあげて考察しているからである。ヨーロッパにおけるシナノキ属の分布変遷や交雑の解析は先例といえるが、最近の分析技術を駆使しての解析には手に汗を握るものがある。

文化史についての記述の山場である第 3 章で、著者は考古学門外漢の私には手にあまる内容だったと述懐するが、本書の中心をなすのは明らかにこの章である。

ところで、科学的証明は、対立仮説を立て、実験を含め証拠を集め、どちらが正しいかを解くの

が一般である。しかし、本書が扱う事象のように実験が難しく、検証が容易でない対象では、上のような論考ができないことが多い。そのため、より矛盾が少ない、あるいはより多くを説明できる仮説を正しいとして採用することがしばしば起きる。そうでもない限り、考察を先に進めることができないからである。しかし、それは科学的に証明されたこととはちがうのであり、その扱いは慎重さが求められるものである。本書を読んで著者が自然科学畑の研究者であることを痛感したのは、この種の論の立て方と、推論への慎重な配慮であった。

日本ではクリ以外にも、例えばカキノキや柑橘類など、人間がその植物の分布の変遷などの動態に関する種はかなりある。このような植物の自然史に挑む方々に本書は多いに参考となるであろう。この点も含め、多くの読者に本書を推薦したい。
(大場秀章 H. OHBA)

92 巻 1 号 正誤 (2017) Errata in Vol. 92 No. 1 (2017)

ページ (Page)	カラム (Column)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
53	right	↑ 1	Pangha	Pangsha
55	left	↓ 5	Pangha	Pangsha